

アロマンティック・アセクシュアルのメディア表現における 社会的認知の探求

東屋 穂香

序論

近年、社会では LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）に対する関心が高まっている。日本では、2023年6月に「LGBT理解増進法」が施工された。この法には賛否こそあるが、国会という中心的な役割を持つ機関で「LGBT」に関する議論がされたことは、セクシャルマイノリティにとって大きな意味を持つ。一方、「LGBTQ+」（「LGBTQIA+」と表記されることもある）における Q（クエスチョニング、クィア）や+に内包される I（インターセックス）、A（アセクシュアル）の社会での認知度は未だ低く、不可視化されているのが現状である。本稿では、「他者に性的に惹かれない」とされるアセクシュアルと、アセクシュアル研究で言及される重要な概念である「他者に恋愛的に惹かれない」アロマンティックに焦点を当てる。

アセクシュアルは、1948年に性科学者であるアルフレッド・キンゼイが発表した *Sexual Behavior in the Human Male* 以降、研究で扱われるようになった（此下 2）。しかしアセクシュアル研究が広がりを見せたのは 2000 年以降からであり（Bogaert 279）、研究の大半はイギリスやアメリカなどの欧米諸国に集中している（三宅 207）。日本でのアセクシュアル研究は近年発展してきている（松浦、三宅、吉岡など）が、アロマンティックを学術研究として取り扱うことの少なさが指摘されている（三宅 1）。アロマンティック・アセクシュアルを扱うウェブニュースなどが増えているものの、その数は十分ではない（林、小野里など）。アセクシュアル・アロマンティックを主題としたドラマや映画も作られるようになったが、これらのメディア表現は十分に引き上げられていない。アロマンティック・アセクシュアルのメディア表現と当事者への影響を分析することで、社会におけるアロマンティック・アセクシュアルへの先入観や固定概念を減少させ、包摂的な社会への促進に繋がると考える。本論文では、1 章でアロマンティック・アセクシュアルの定義の説明をし、アイデンティティの形成について明らかにする。続く 2 章では、アロマンティック・アセクシュアルの生きづらさの背景にある「強制的性愛」について先行研究を用いて、性別がセクシャリティにどのように作用するか考察する。最後に 3 章で、アロマンティック・アセクシュアルに向けられる偏見や差別を踏まえ、日本で公開された映画、ドラマ作品である『そば

かす』(2022)、『恋せぬふたり』(2022)、『今夜すきやきだよ』(2023)の三作品を用いる。三作品を比較し、それぞれに共通するテーマや、アロマンティック・アセクシュアル表象が、社会的認知に与える影響を明らかにする。

第1章 アロマンティック・アセクシュアルの概要とアイデンティティ

1-1 アロマンティック・アセクシュアルの定義とその多様性

アロマンティック・アセクシュアルとは、それぞれ恋愛的指向・性的指向を指す。アロマンティック (Aromantic) の定義は「他者に恋愛的魅力を感じない、またはほとんど感じない」とされている。一方アセクシュアル (Asexual) は一般的に「性的惹かれをしない人」と定義されている。これらは最も有名なアセクシュアル・コミュニティのウェブサイトである Asexual Visibility and Education Network (AVEN)¹にて定義されている。アセクシュアル研究において、その定義は多様であり、「性的惹かれをまったく経験しない人」と定義された(Bogaert 284)が、アセクシュアルはしばしば「まったく～ない」と消極的に定義されることについて指摘されている(松浦 117)。そのためアセクシュアルと非アセクシュアルの間で正確な境界線を引くことは、その間に存在する多様なアイデンティティを持つ人々を不可視化してしまう。アセクシュアルと非アセクシュアルの間に存在する多様なアイデンティティを理解するための概念としてスペクトラム (spectrum) が存在する (Mardell)。

アセクシュアル・コミュニティにおいて、性的指向と恋愛的指向は分けて考えられる。この考え方を「スプリット・アトラクション・モデル (the split attraction model)」と呼ぶ(三宅 212)。他者に恋愛的魅力を感じないアセクシュアルを「アロマンティック・アセクシュアル」、他者に恋愛的魅力を感じるアセクシュアルを「ロマンティック・アセクシャル」と呼ぶ。「ロマンティック・アセクシャル」は惹かれる性別の対象によってヘテロロマンティック、ホモロマンティック、バイロマンティックと細分化されている(三宅 212)。セクシュアルからアセクシュアルのスペクトルでは、「グレイアセクシュアル/グレイセクシュアル (gray-asexual/gray-sexual)」、「デミセクシュアル (demisexual)」が挙げられる。前者は「アセクシュアルとセクシュアルの間のある位置で自認している人」、後者は「情緒的な繋がりができてからのみ性的惹かれを感じる人」という意味が採用されており、他には「性的な感情を返されることや他者との行為を必要としない形で性的に惹かれる」という意味の「リスセクシュアル (lithsexual) など様々である(三宅 211)。ロマンティックからアロマンティックのスペクトルとして「グレイアロマンティック/グレイロマンティック (gray-aromantic/gray-romantic)」や「デミロマンティック (demiaromantic)」、「リスロマンティック (lithromantic)」というカテゴリーが存在する(三宅 212)。アセクシュアルとそれに近いカテゴリーの全体を指す「Ace」という略語があり、これとスペクトラムを組み合わせる「アセクシュアル・スペクトラム、Ace スペクトラム」と呼

ぶ。アロマンティックにおいても恋愛的指向に関連する多様なアイデンティティの全体を「Aro」と呼び、「アロマンティック・スペクトラム、Aro スペクトラム」という言葉も使われている。また Ace と Aro の両方のスペクトルを指す場合には「アロマンティック/アセクシュアル・スペクトラム、Aro/Ace スペクトル」と呼ぶこともある（三宅 213）。

アセクシュアルは英語圏と日本で一般的に使われている定義には違いがある。日本では「アセクシュアル」と「ノンセクシュアル」という言葉が用いられるが、この場合のアセクシュアルは、アロマンティックかつアセクシュアルに該当し、ノンセクシュアルは他者に恋愛感情を抱くが、アセクシュアルである人を指す（吉岡 62）。

1—2 アセクシュアル・アイデンティティ形成と自認

アセクシュアルは主に「性的惹かれをしない」とされるが、AVEN ではアセクシュアルを自認していることもその定義に含まれている（Hiderliter 172）。しかし、その自認は容易いことではなく、様々な困難がある。そこで、アセクシュアルがいかにして自認に至るかを、このパートでは、マーク・キャリガンによる先行研究で示された発達段階から読み解く。アセクシュアル・アイデンティティの発達段階は「個人と周囲との差異の自覚」、「自己探索、自問自答」、「自己明確化」に分けられる。この発達段階は多くの文献で共通していることが分かっている（此下 5）。性的惹かれをしないというアセクシュアルの概念が理解されない背景には、正常な人間ならば他者へ性的に惹かれるのが当然だという社会規範（松浦 89）という背景がある。まず初めの段階では、アセクシュアルの人は誰もが性的な事柄に興味があるはずだという考えを持つ周囲の人との違いに違和感を抱くことでその差異を自覚することに繋がる（Carrigan 470）。しかし性的に惹かれることが普遍的であるため、周囲との違いを自分の経験のなさや病理的なものだという自問自答的な考えに至ってしまう（Carrigan 471）。そしてアセクシュアルという概念を知ることによって自問自答から抜け出し、自己明確化の段階に達成する（Carrigan 471）。しかし発達段階には個人差があり、全ての人が同じ発達段階を経験するわけではない。他人に性的関心を抱くことを当然だとする社会的な圧力は自問自答的な考えに至らせる場合もあるが、自己探索の中で他のセクシャリティやアイデンティティに焦点を当てることも考えられる。

アセクシュアルの人々は「病理化、孤立、望まない性交渉と人間関係の衝突、認識の権限(epistemic authority)の否定」という4つの悪影響を被ることが示されている（Gupta 138;松浦 91 に引用）。これらはアセクシュアルを自認する妨げになっている。病理化は、アセクシュアル当事者が自身の性的関心のレベルに満足していても、周囲

から健康的ではないとされ、精神障害のレッテルを貼られることである。アセクシュアルは性的欲求低下障害（HSDD）²と結びつけられてきた（Hinderliter 167）。しかし HSDD は専門家によって診断され、性的関心を回復させる目的に対し、アセクシュアルは個人でラベリングをし、他人に性的関心を持つための治療は必要ないものとされる。次に孤立は、他者に性的関心持たないことで、性愛を前提とした主流社会から疎外されていると感じさせる。また、恋人や夫婦関係をはじめとする人間関係においてセックスが重要なコミュニケーションとされ、望まないセックスによる衝突を起こす場合もある。そして認識的権威の否定は、自身のアセクシュアルであるという認識を否定されることである。アセクシュアルは他者に性的に惹かれないことで、性愛や他人と性的な関係を結ぶことが前提とされる社会から受ける期待や誤解、偏見などの影響を受けていることが分かった。

第2章 アセクシュアルと強制的性愛

本章では、強制的性愛を含むセクシャルノーマティビティという概念をその派生元である強制的異性愛（ヘテロノーマティビティ）と共に整理したうえで、アセクシュアル男性がそういった社会規範で葛藤を抱く原因を先行研究から読み解き、明らかにしていく。

2-1 強制的性愛

詩人アドリエンス・リッチが提唱した概念である強制的異性愛は、女性を異性愛制度に参加させるよう強制する規範と実践の制度である（Gupta 133）。この概念は異性愛以外の性的指向を持つ同性愛者や両性愛者を不可視化している社会を批判しているが、他者に性愛を向けることが前提にされ、性愛そのものの有無に関しての議論が不十分であった。強制的異性愛だけでは多様性の考慮が不十分だったために生まれた概念が強制的性愛である。

強制的性愛とは、人は誰も他人に性的に惹かれるものでセックスを自然に欲しているものだという前提を無意識に押しつけてしまうことであり、現在のアセクシュアル研究でセクシャリティにおける社会規範として主流な概念である（松浦 116）。

エラ・プジビロは強制的性愛について以下のようにまとめている。

(1) 他の関係や接触、その他の活動よりも性を優先し、(2) 自己形成と自己認識のプロジェクトにおいて性を中心に捉える、(3) セックスを健康に結びつけ、(4) セックスを夫婦関係、愛、親密さに結びつきというセクシャリティとセックスを特権化するように機能する技術（Przybylo 185; 松浦 90に引用）

を指す。クィア・スタディーズの観点から批判されてきた異性愛規範ではあるが（松浦 115）、クィア・スタディーズ内でも、人が他人に性的に惹かれるものだという考えは未だ根強く存在している。強制的性愛をはじめとするセクシャルノーマティビティによってアセクシュアルは不可視化され、プジビロが整理したようにセックスや他人への性的惹かれをしないことを、未熟で不健康とすることで、アセクシュアル当事者を人間として正常な状態でないと思込んでいる。アセクシュアルを取り巻く強制的性愛はアセクシュアルを自認する人だけでなくすべての人々の行動を制限するシステム（Gupta 134）であり、アセクシュアルはジェンダーやセクシャリティ、人種や障害の研究とも深く関わっている（松浦 92）。

ジャーナリストのアンジェラ・チェンの著書で、ゲイ男性とセクシャルノーマティビティの関わりについて取り上げている。

「シングルのゲイ男性はセックスしているものだと私たちは思い込んでしまっていると思う」

二十二歳のゲイでありながらたくさんセックスをしないのは、恥ずかしいことだ。エースでホモロマンティックの男性たちは、ゲイ・コミュニティにおける強制的性愛のせいで二重に排除されているように感じる（チェン93）

この著書の中でアンジェラ・チェンのインタビューに男性はこのように話した。ゲイで男性ならば性欲過多に違いないという思い込みもまたセクシャルノーマティビティの1つである。性的指向と恋愛指向は別物であるが性的指向と恋愛的指向を同一視してしまうことで、エースでホモロマンティックの男性のように性的指向と恋愛指向が一致しない存在を不可視化している。この場合に周縁化されているのがアセクシュアルだということも強制的性愛がいかにか根強いかに読み取ることが出来る。また男／女のどちらでもない性自認を意味するXジェンダーでアセクシュアル当事者の朝日新聞デジタルが行ったインタビューでは

男女関係のセオリーに自分を合わせようと、交際に踏み切った男性は、「彼女」になった途端キスをしたり体を触ったりしてきました。「腕の産毛をそれ」と言われたり、料理や掃除といった「彼女らしさ」を求められたり。苦しくても「これが社会」と言い聞かせましたが、半年が限界でした。（杵田、田中）

世の中には男と女しか存在しておらず、誰もが異性愛の範疇にいるという考えは、インタビューの参加者のようなXジェンダーの存在を不可視化している。また交際に至った時点で恋人同士ならば性的な接触をとってもよい、むしろそうすべきであるというような考えはその人の持つアセクシュアリティを一切無視している。こうした社会の根底にある固定概念は、アセクシュアルだけでなくさまざまなジェンダーやセクシュアリティの障害となっている。

強制的性愛を含むセクシャルノーマティビティは社会の中で作られていった規範であるため、同じく社会の中で形成されたジェンダーバイアスと絡み合っていると考えられる。ジェンダーバイアスは、男性／女性はこうあるべきという固定概念であり、この性別二元論的思想は両性の枠に当てはまらない人たちを社会的に無視し

た概念である。女性は禁欲的で純潔であるべきという考えは、他人に性的に惹かれないアセクシュアルと結びつけられることが多く、反対に男性は常に性に対してポジティブでいることが男性らしさとされ、男性はセックスをより多く経験することで真の男性となり、男性コミュニティの中で優位に立つべきだという固定概念がある。

こうした固定概念はミソジニーを作り出す要因の1つとも言える。アセクシュアル男性はセックスに関心がない一方で、インセルはセックスに強い関心を持っている。インセル (involuntary celibate, INCEL) は望まない禁欲者を意味し、自分とセックスしてくれない女性に怒りの矛先を向け、女性嫌悪や憎悪を高めている。こうしたインセルによるミソジニー事件は海外や国内でも起こっている。2014年5月、米カリフォルニア州のアイラビスタで当時22歳のエリオット・ロジャー容疑者が銃や刃物を使って6人を殺害、14人を負傷させたうえで自殺するという事件が起こった

(「非モテ男子が暴発するミソジニー (女性嫌悪) 無差別テロの恐怖 英で22歳男が散弾銃で7人を殺傷して自殺」2021)。彼は自身が童貞であることへの欲求不満と女性嫌悪に満ちており、「女性がなぜ、理想的で偉大な男性である自分とセックスしたがるのか理解できない」と訴え、自分への愛とセックスを否定した社会へ復讐として凶行に及んだという。この事件を機にロジャー容疑者をインセルのヒーローと崇める男性たちが次々と事件を起こした。日本でもミソジニー事件が起こったのは記憶に新しい。2021年8月、小田急線の車内で刃物を振り回した容疑者が乗客10人にケガをさせたとして、殺人未遂で逮捕された。容疑者は「幸せそうな女性を見ると殺したいと思うようになった。誰でもよかった」と供述しており、この無差別テロからミソジニーという言葉は日本でも広く知られるようになった (「小田急線切りつけ、逮捕の男「誰でもよかった」…「幸せそうな女性見ると殺したいと」)。ミソジニー事件の容疑者に共通しているのは、女性から自身へ関心に向けてもらえないことへのコンプレックス、社会において男性 (である自分) は女性より優れているに決まっているという考えを持っている。さらに自分の存在を認めない「社会」への復讐や「誰でも」よかったという供述を述べつつも自身のむしゃくしゃとした苛立ちのターゲットには女性を選んでおり、女性に好かれたい反面で女性なら傷つけても構わないという女性蔑視に矛盾を感じる。インセルのこうした行動の根底にはセクシャルノーマティビティが根付いており、男性にとって女性との繋がりは単なる性的欲望の解消にとどまらず、自身を社会の理想的な男性へと近づけるためのステータスの一つと見なされている。男性なら女性と付き合ったり、セックスをしたりということが当たり前だという風潮や、その社会からの期待に応えな

なければならないというプレッシャーは、男性が自分に関心を向けない女性に敵意を抱くミソジニーを作り出している。殺人や加害は到底認められるものではないが、この強迫観念のもとでは彼らもまた被害者だと考えられる。

2-2 アセクシュアル男性と強制的性愛

セックスに関心のない / 限りなく低いアセクシュアル当事者である男性は社会に蔓延している男性性と自身のセクシャリティとの間で葛藤を経験している。プジビロのアセクシュアル男性が抱く葛藤を調査した先行研究を用いて、強制的性愛がアセクシュアル男性をいかに縛っているか考察する。

プジビロによるインタビューは2011年に20代前半から30代半ばの3人のアセクシュアル男性に対して対面で行われた。男性性とアセクシュアルを研究対象とすることから、男性であること、アセクシュアルであること、インタビューに興味があることを条件に参加者を募った。参加者はそれぞれ自身のことを「男性」、「男性的な性」としたがジェンダーとセクシャリティが明確に区別されるものではないとしている。また3人の参加者はアセクシュアルを明確に自認し、異性愛者であるが、プジビロはこれらをアセクシュアルの代表するものとする意図はないとした (Przybylo 226)。

この調査から明らかになったことは、参加者は共通して、男性は自身がセクシャルであることについて内在的な圧力を抱えていると認識していることである。内在的な圧力とは、男性コミュニティに溶け込み、他の男性と良好な関係を築くために、性にポジティブな姿勢を示す必要があることである。参加者はセックスや女性に興味関心を持つことが、男性性の一種のアイデンティティとして機能しているという認識を持つ。男性コミュニティ内において、アセクシュアル男性はそれらに興味を持たないことに疎外感を感じたり、女性を性的に消費することに対し嫌悪感を抱いたりという経験をしている。セックスが中心化された社会で、セックスに関してそれぞれ懐疑的であったり、嫌悪感を抱いたり、適応しなければというプレッシャーをかけられている。

当事者団体である Asexual Community Survey (ACS) の2018年の調査では、13歳以上の人に対し「自分をアセクシュアル・スペクトラムだと認識していますか？」という質問を用意し、回答者 15177 人の中で「はい」と答えた 91.1% と「わからない」と答えた4.2%の人をACEとした (Weis 8)。回答者の性自認は女性が 61.1%、男性が 13.4%、該当なしが 24.8% となっており、アセクシュアルを自認する男性は女性に比べて少ないことが分かる (Weis 11)。ACS 以外でもアセクシュアルの人口規

模や特徴を調査した団体は多く、性自認に関する設問を設定している場合にはアセクシュアル自認女性より男性の割合は低い（三宅 225）。強制的性愛からアセクシュアルは女性に結びつけられることが多い。強制的性愛により結びつけられる女性らしさとは女性の性的欲求が低く、性的に未熟であるべきだというステレオタイプのことである。一方で男性は性に対してポジティブで、セックスにおいて常に主導権を握っているだろうという思い込みがあり、男性がアセクシュアルだと自覚または自認することの難しさに繋がっているのだと考えられる。これこそがアセクシュアル男性の葛藤であり、強制的性愛がアセクシュアル当事者に自分はストレートなのではないかという疑いを抱かせる構造を作り出している。参加者の中でも、結婚相手との関係を維持するためのセックスや、他の男性に付き合い、セックスの相手を探す際に自らの性的関心を仰々しくアピールするなど、男性性を誇示することで人間関係や社会的立ち位置を保つために望まない行動をとっている人もいる。中には女性と恋愛関係になることを望みつつも、セックスが期待されることから関係を築くことについて諦めを抱いている人も見られた。アセクシュアル男性は自分の属するコミュニティ内で男性らしさを期待されているがゆえに思い悩んでいるのである。

アセクシュアル男性が不可視化される背景には、セックスが社会の中心であることの他に、文化的要因も見受けられる。参加者の一人がそういった強迫観念を「ハイパー・セクシャルカルチャー」と表した（F 228）。映画やテレビ、街中で目にする広告などに性的、恋愛的文脈が用いられることが、異性愛規範を助長している。

2—3 アセクシュアルの社会的認知への提案

異性愛規範で生きるアセクシュアル男性の葛藤について取り上げたが、今後アセクシュアルはどのように認知されるべきか。それは非当事者の意識改革や認知拡大が必須であるが、それらの働きかけにはアセクシュアル当事者の存在も必要不可欠であると考えられる。SNSやウェブサイトなど多くの人々が活用するインターネットでアセクシュアルに関する情報をまとめることや、アセクシュアルに関するイベントの開催で、当事者の講演や対話で理解を促すといったことは、非当事者や自認に至っていない当事者にアセクシュアルというセクシャリティの存在を認知させるという点では有効なものだと考えられる。一方で、非当事者が数ある情報の中からアセクシュアルに関するものを主体的に選ばない限り、認知に至らないのではという問題点もある。また匿名/実名であっても当事者の経験を必要とすることから、それら

は本来かなり私的なものであると同時に、アセクシュアルに偏見を持つ人から加害を受ける可能性も考えられる。カミングアウトは個人の選択によるものだが、カミングアウトをした当事者への配慮は十分にされるべきである。

その他に認知を広める手段の一つに、多くの人々が携わるメディアやエンターテインメントでアセクシュアルを取り扱うことが挙げられる。異性愛を蔓延させている映画やテレビ、雑誌を利用してアセクシュアルをより多くの人に知らせることが可能なのではと考える。また複数のアセクシュアル当事者や研究者が携わる必要性から、アセクシュアルについてより広く伝わるのではないだろうか。

第3章 アセクシュアル、アロマンティックとメディア表現

大衆の関心が集まる映画やドラマなどのメディアは、個人のアイデンティティの形成や経験に強い影響力を持っている。しかしセクシャリティを取り扱うメディアでは異性愛が中心となり、アロマンティック・アセクシュアルをはじめ、セクシャルマイノリティの表象は十分ではないのが現状である。それについて福田委千代は「メディアにおける性愛の表象」というテーマを含んだ『セクシャリティの戦後史』（小山、赤枝、今田）の書評でこう述べている。

異性とつきあうこと、異性と性関係をもつこと、異性と結婚することは、誰からも何も教わらず、「自然に」行われるものではなく、大量の知識が動員されつつ、「自然なこと」として構築されていくものなのである。（福田 56）

異性愛を主題にする、またはそれらを内包する作品は異性愛規範の社会を作り上げた。異性愛を「自然なこと」として社会に構築させたメディアは、異性愛に当てはまらないセクシャリティを周縁化し、現在に至るまでその認知を遅らせる要因を作り出している。

本章では、アロマンティック・アセクシュアルが主題となっている作品を扱い、アロマンティック・アセクシュアルのアイデンティティと当事者に向けられる偏見の表現を分析し、メディア表現がどのようにアロマンティック・アセクシュアルの社会的な認識に影響するのか考察していく。扱う作品は『恋せぬふたり』（2022）、『そばかす』（2022）、『今夜すきやきだよ』（2023）の3作品である。これらは全てアロマンティック・アセクシュアル当事者や研究者の監修が入っている。この3作品に共通しているのは、アロマンティック・アセクシュアルというマイノリティに属するキャラクターがメインに据えられていることであり、彼らの日常生活とそれに付随するマイクロアグレッションを描いていることである。さらに〈同居〉というセーフスペースも描かれている。本章でのセーフスペースとは、強制的性愛な社会でアロマンティック・アセクシュアルがその人のアイデンティティを阻害されない空間を指す。3作品では、セーフスペースとアロマンティック・アセクシュアルがどのように関わるのかをそれぞれ別角度で描いている。

3—1 『そばかす』（2022）

この作品は他人に恋愛感情や性的関心を抱かない女性が周囲と関わりながら自分自身と向き合う姿を描いた長篇映画である。主人公の蘇畑佳純はコールセンターに勤める30歳であり、他人に恋愛感情や性的関心を抱いたことがないアロマンティック・アセクシュアルとして描かれている。佳純は妹の結婚と妊娠により母親からプレッシャーをかけられ、無断でお見合いをセッティングされてしまう。しかしお見合い相手の男性は結婚よりも友達付き合いの関係を望んでいた。

佳純はアロマンティック・アセクシュアルというセクシャルマイノリティであるが故に周囲

から疎外されてしまう孤独感や、佳純自身のセクシャリティを友人や家族に理解されない葛藤を抱いている。例えば、佳純は友人に連れられた飲み会で男性の好きな仕草やこれまでどんなデートをしてきたのかを聞かれ、その場の雰囲気崩さないようにありきたりな回答をする。恋人を作ろうとしない佳純に対し、結婚することが幸せだと考える母親が佳純に無断でセッティングをする。これらはマイクロアグレッションに当たる。

異性愛規範に囚われた人の視点では、飲み会などの男女が集まる場所でのこうした質問はその場を盛り上げるための楽しい会話であり、結婚を催促するのは娘の幸せを願う母親の思いやりであり、そこに一切の悪意は込められていない。しかし主人公の佳純の視点に立つことで、彼らの思いやりが煩わしいものになり、異性愛規範に囚われた人からアロマンティック・アセクシュアルに対しての無理解が浮き彫りになっている。こうした無理解が作中何度も佳純に降りかかるが、彼女は異性愛を前提とする人、またその人との関わりに対し強い嫌悪感を表に出すことはなかった。怒りを露わにした場面も見られるがそれは望まないお見合いを無断で決めた母親の身勝手な行動に対してである。佳純は自分の性的指向を周囲が理解することに期待していないことが読み取れる。

佳純のお見合い相手の男性は結婚相手より友達を求めており、意気投合した二人は恋愛抜きの付き合いを重ねていた。しかし二人で過ごすうちに佳純に親愛を感じた男性は佳純にキスをしようとし、自分の恋愛感情を打ち明けた。恋愛感情抜きで信頼していた男性からの突然の行動に困惑する佳純だが、男性は佳純と過ごすうちに感じた居心地の良さを恋愛感情と捉え、佳純も自分と同じ気持ちを抱いているはずだと思っていた。佳純は他人に恋愛感情や性的関心を持たないと正直に伝えるが、自分の告白を断るための嘘に違いないと受け入れられることはなかった。男女が共に過ごす中で生まれた感情を恋愛感情と決めつけてしまうのは、強制的性愛の考えのもとで他人に恋愛感情や性的関心を抱かない人が存在することを想像することが難しく、異性愛範疇を越える人（本作品ではアロマンティック・アセクシュアル）が現われた際に当事者からのカミングアウトを虚言だと受け流したり、その人を否定したりしてしまう。佳純のお見合い相手の男性が佳純の恋愛的/性的指向を受け入れられなかったことにはこういった背景がある。アロマンティック・アセクシュアルが世間に浸透していないマイノリティの一つとされるのは、強制的性愛が一つの原因である。

佳純は自分が恋愛や結婚に興味関心がないことを積極的に伝えるどころか理解されないと諦めているような描かれ方をしてきた。ここまで『そばかす』の前半とすると、後半からは同級生であった真帆との出会いをきっかけに自分のセクシャリティに向き合おうと奮闘する様子が描かれる。

職場をコールセンターから学童へ変えた佳純は子供たちのデジタル紙芝居を作ってほしいと頼まれ、シンデレラの物語を作ることになる。佳純の手伝いで参加していた真帆は、王子に選ばれることでシンデレラが幸せを手に入れるという男性中心の内容に怒りを露わにし、その考えに共感した佳純は恋愛感情も性欲もないことをカミングアウトする。真帆は佳純のようなシンデレラを書くことを提案し、アロマンティックで自分の意志を持ったシンデレラを作り上

げた。児童とその保護者をはじめ多くの人が紙芝居を見に来ていたが、自分の知っている内容と違うと気付いた大人達のざわつきに恐怖を感じた佳純は途中で止めてしまう。

作中、シンデレラは誰もが知っている異性愛の物語であり、結婚（権力を持った男性に選ばれること）が女性にとっての幸せであるという認知が前提で描かれている。そのため佳純が作ったシンデレラは彼らから異質なものと受け取られてしまった。この反応を受けて、佳純は結末を見せることなく中断してしまうが、この行動はマイノリティがマジョリティに立ち向かっていくことがいかに勇気のいることを示している。アロマンティック・アセクシュアルな佳純が、マジョリティの異性愛な結末のシンデレラがスタンダードであるという主張を理解し、自らの主張を萎縮せざるを得ない状況にあるのは、強制的性愛の中で佳純のようなマイノリティの人が存在する余地がないことの表れである。

ここまで母親や友人、周囲の人々など、佳純のセクシャリティを理解しない人がいる一方で、真帆は佳純にとっての理解者として描かれる。佳純は真帆と一緒に住むことを提案し、真帆も同意するが、同居が具体的になると真帆から一緒に住むことはできないと断られてしまう。理由は昔付き合っていた人とよりを戻し、結婚することになったからである。

アロマンティック・アセクシュアルは他人に恋愛感情や性的欲求を抱かない（抱きづらい）ことから、誰とも恋愛・結婚をしないのなら生涯孤独でいなくてはならないのだろうか。当然そんなことはないが、佳純は母親から男性と結婚することを望まれているように、女性である佳純がお見合い相手として宛がわれたのは男性で、恋愛・結婚の相手は異性でなくてはいい制約があるかのように強制的異性愛が垣間見える。一緒に暮らす相手は必ずしも異性や、恋愛・結婚で結ばれた相手でなければならないということはない。しかし佳純と真帆のように、一方がアロマンティック・アセクシュアルで、もう一方がヘテロロマンティック・ヘテロセクシャルでは、生涯を共にするパートナーになることが難しい。ヘテロロマンティック・ヘテロセクシャルの全員が結婚するものではないが、真帆は結婚を選び、佳純との同居を拒否したのではなく、自動的に真帆にとって友人であり同性の佳純と暮らすという選択肢がなくなっただけにも取れる。佳純は友人として真帆の結婚を心から祝福していて、真帆も結婚式での友人代表のスピーチを佳純に頼んでいるため、二人の関係が絶たれたわけではない。佳純と真帆は同居には至らなかったが、アロマンティック・アセクシュアルではない人と暮らすということは、その人の人生に結婚という選択肢が見えるまでの期間限定の暮らしである。恋愛や結婚が人生の選択肢として存在しないアロマンティック・アセクシュアルにとって、結婚を祝福することが嫌なのではなく、結婚を肯定することで幸せを一般化し、その一般化された幸せの中に自分が存在しない、することがないことによって疎外されることを望まないということである。

アロマンティック・アセクシュアルに限らず、幸せは誰かに決められるものではないし、幸せの形は人それぞれにある。しかしセクシャルノーマティビティの中では未だに恋愛や結婚が全員にとっての幸せだと捉える人がいる。作中で佳純のシンデレラの結末が最後まで明かされなかったのは、佳純作のシンデレラの結末＝全てのアロマンティック・アセクシュアルにとって幸せという構図を避け、フィクションの物語としての、あらゆるアロマンティック・アセク

シュアルの幸せを模索する必要がある現状を表しているからだろう。『そばかす』の結末は、佳純のシンデレラを最後まで観た同僚の「自分と同じことを考えている人がどこかにいる、それだけでいいやと思えた」というセリフで、佳純と同じことを考えている人が同じように存在していることに気づくところで終わる。佳純は自身のセクシャリティを否定も肯定もされてきた。ただ同じ目線で物事を捉える他人との出会いがなかったことで、マイノリティの孤独を感じてきた。しかし些細なきっかけが、アロマンティック・アセクシュアルである佳純は孤独ではないことに気付かせた。他人とすぐ触れ合える距離で生きることが全てではなく、自分と同じ考えの人間が当たり前で生きていることを知った佳純の晴れ晴れとした表情は、アロマンティック・アセクシュアルを主人公とした作品の終わり方の一つを示している。

『そばかす』は作中で「アロマンティック・アセクシュアル」という言葉を用いずに、「恋愛感情も性的関心も抱かない」人として佳純を描き、定義付けすることでセクシャリティを明確化することを避けている。これは監督の玉田真也がインタビューで言及している。

名前をつけてしまうことで、輪郭がはっきりしてわかりやすくなると同時に、そこから削ぎ落とされる部分も出てくると感じたんです。削ぎ落とされた部分も、その人の一部なのに。(安達)

セクシャルマイノリティを扱う作品は、本来ターゲットとして含まれるはずの当事者を置き去りにすることが度々見られる。例えば『怪物』(2023)はセクシャルマイノリティを扱う作品であるが、是枝監督は「LGBTQ に特化した作品ではない」とし、それでいてクィア・パルム賞を辞退しなかったことに疑問を持たれている(「映画『怪物』はなぜ性的マイノリティを描きながら不可視化したのか。映画製作の構造的な問題を考える」2023)。しかし『そばかす』では「アロマンティック・アセクシュアル」という言葉が出されなかったが、監督や制作者であるメディア側が、アロマンティック・アセクシュアル当事者に意識を向け、セクシャルマイノリティを扱っている。あえて定義しなかったのは、セクシャリティのグラデーションに配慮したためであり、多様なアイデンティティを持つアロマンティック・アセクシュアルの存在を肯定している。

3—2 『恋せぬふたり』(2022)

この作品は、他人に恋愛感情や性的欲求を抱くことのないアロマンティック・アセクシュアルの男女が同居をはじめ、周囲の人達にアロマンティック・アセクシュアルの認知や関わり方に影響を与えていくドラマである。恋愛感情が分からない主人公の兒玉咲子は、結婚を急かす母親・さくらからのプレッシャーに耐えられず実家を出て親友の千鶴とルームシェアを決めるが、元彼とよりを戻すことを理由に断られてしまう。咲子はそこではじめて自分がアロマンティック・アセクシュアルであることを自認し、自認のきっかけとなったサイトの運営主、高橋羽と出会う。ルームシェアもなくなり、実家にも戻りづらい咲子は同じセクシャリティである高橋

に同居を提案し、「家族（仮）」としての二人の生活が始まった。

『そばかす』では異なる恋愛的指向、性的指向を持つ主人公とその友人の間では実現することがなかった同居だが、『恋せぬふたり』は同居が物語の軸となっている。アロマンティック・アセクシュアルの男女同士での同居が、恋愛至上主義な社会でどのような意味を持つのか注目したい。

「家族（仮）」として同居を始めた咲子と高橋がこの同居によって得られるものは、周囲のマイクロアグレッションからの回避である。高橋は独り身であることを決心しているにも関わらず、周囲の人に何度もお見合いを勧められる。余計なお世話だと思っても高橋を思いやった純粋な好意でもあるため、無碍にできない状況に辟易していたが、咲子との同居は、不本意ながら異性愛者を装うことで、差別を受けずに済む環境を作ったのである。一方、咲子は自分のセクシャリティと高橋との関係を隠し、恋人同士と偽ってさくらに紹介することでぎくしゃくしていた家族関係を丸く収めようとした。同居は高橋と咲子が独り身であることから受けてきた異性愛規範のマイクロアグレッションをなくすことに繋がったが、これらには高橋と咲子自身が異性愛者として振る舞う、周りに異性愛者だと認知してもらうことが前提となっている。そして高橋と咲子がアロマンティック・アセクシュアルとして生きるには、周囲の人からのセクシャリティへの理解と配慮が十分ではないことが分かる。高橋を恋人として家族に紹介した咲子は、家族から高橋へのデリカシーのない発言に怒りを感じ、自分のセクシャリティと、高橋との「家族（仮）」の関係を吐露する。これを受けた家族は、咲子のアロマンティック・アセクシュアルというアイデンティティと、恋愛関係にない男性と同居していることを否定する。この反応からアロマンティック・アセクシュアルの認知度の低さと、恋愛関係にある男女を健全とするような考えが根強いことが分かる。異性愛規範の強い作中で恋愛もセックスも伴わない新しい関係に自分たちの居場所を見いだすことから始まったこの「家族（仮）」という関係は、周囲から到底受け入れられたものではないというような反応を伴って描かれているが、この描写はアロマンティック・アセクシュアルを周縁化する異性愛規範に基づいた社会構造を映したものであることを示している。主人公を通して当事者だけでなく非当事者がこの世界を見ることで、どのような関係であってもその関係に性愛を持ち込むことに違和感を抱くことができるようになっていないのかと考えられる。

作中登場するキャラクターのほとんどが初めは咲子と高橋に対し偏見を抱えているが、回を重ねるごとにゆっくりとその考え方は変化していく。咲子の同僚で元交際者であるカズは咲子に対して未練があり、高橋との関係を何度説明しても聞く耳を持たず、恋愛関係にあると決めつけていた。咲子の妹・みのりや母・さくらもまた、家族（仮）の関係を受け入れることができず、咲子のカミングアウトに対しても信じられないといった様子を露わにした。しかしカズは咲子を理解したい一心で、アセクシュアルについて書かれた本に大量の付箋をつけながら読み込むなど、彼なりに咲子や高橋のセクシャリティを自分の価値観に加えていく様子が分かる。妊娠中の妹のみのりは、結婚や妊娠を経験したことのない咲子を見下した発言をしていたが、急な破水から出産まで咲子が立ち会い支えてくれたことから、自分の発言を省みるようになる。

またカミングアウトの一件からみのりの出産まで会うことがなかったさくらと再会を果たした際に、さくらは咲子に対して未だに結婚して子供を持ってほしいと思っていることを認めた上で、自分が選ばなかった恋愛抜きの幸せを掴んでほしいと伝える。このキャラクターたちのさまざまな変化から当事者に対する歩み寄り方に正解はないことが読み取れる描き方である。またマジョリティがマイノリティに対する意識を変えていくのは簡単ではないということが物語を通して読み取れる。理解しようとしてできるものでもなく、理解に至るには長い時間をかけたり、ふとしたことがきっかけになったりとさまざまな要因があることをカズやみのり、さくらを通して描いている。

異性愛規範の中でそれに疑いを持たずに生きてきた人たちが他人に恋愛感情や性的関心を抱かない人を受け入れられない/受け入れるという表現は、異性愛者中心社会の表現であるが、アロマンティック・アセクシュアルは最近になって生まれた概念などではなく、ずっとそこに存在していたものが周縁化されてきたという前提を踏まえることが必要である。

最終話では高橋は転職をきっかけに家を出ることになるが、咲子は高橋の家に住み続ける。居心地の良さをお互いに感じていたが、高橋は同居を解消することで「家族（仮）」でなくなるのではと考えていたが、咲子はそれを否定し、関係に拘らずに常に自分たちにとってベストな関係を考えていこうと提案する。離れていても共に生きていくことができるといった、二人だけの幸せの形を見つけ、物語を締めくくった。

本作品の脚本家である吉田恵里香はインタビューで語っている。

ドラマのテーマとして、「自分の幸せは自分で決めていい。誰にも文句を言われるものではない」を目指しました。「恋愛」は幸せの象徴として語られがちですが、そうじゃない人もいます。「恋愛がすべてじゃない」ということは絶対に言いたかったんです。（『恋せぬふたり』脚本家・吉田恵里香インタビュー 「知って、気づいて、直す」ことが世の中の理解につながるのではないか」2022）

作中の咲子と高橋が家族ではなくあえて「家族（仮）」という言葉を使っているのも、ステレオタイプな幸せの象徴に（仮）という言葉をつけるだけで別の道がよりベストなら道を変えてもいいというメッセージである。二人の同居は、異性愛規範から疎外されたアロマンティック・アセクシュアルを従来の家族の形に当てはめず、「家族（仮）」として作り上げられ、咲子と高橋にとって誰に阻害されることのないセーフスペースとなっていった。そこからさらに「家族（仮）」という二人の中の固定概念すら乗り越えることで、自分にとって安心できる場所、人との間に名前をつけなくてもその関係は変わらないことを表している。これは同居を経たことで二人が得た気づきであり、それらは周囲の人々にも影響している。二人の同居から始まり、だんだんと彼らの生活の風通しがよりよくなっていく様子は、見えないセクシャリティとして自己主張を遮られてきたアロマンティック・アセクシュアル当事者と、これまで他人に対して自身の固定概念を押しつけたことのある人などさまざまな登場人物に影響を与えたのではと考え

る。

『そばかす』では明確に定義することを避けた「アロマンティック・アセクシュアル」だが、『恋せぬふたり』では「アロマンティック・アセクシュアル」を主人公たちのセクシャリティとして定義している。これはアロマンティック・アセクシュアルがセクシャルマイノリティとして広く認知の必要があるからである。作中でも非当事者がアロマンティック・アセクシュアルを知ること、無意識による差別を改めていく様子が描かれたように、「アロマンティック・アセクシュアル」という言葉を非当事者に知らせることが当事者に向けられるマイクロアグレッションをなくしていくことに繋がると考えられる。また本作では咲子が家族に向けて自身のカミングアウトをした際に、高橋に了承を得ずに彼のセクシャリティを公にしてしまう。セクシャリティに関して、当事者に断りなく第三者へ話してしまうことをアウトティングという。アウトティングによって話が広まり、当事者が第三者から心ない言葉を投げかけられることで、その言葉に傷付き、多くの人に知られていることが苦痛になる（田中 116）。マイクロアグレッションと合わせて、セクシャリティへの知識がないことから起こる無意識の行動が当事者のアイデンティティを傷つける行為であることを説明している。本作品での定義は主に非当事者に向けられたものであるが、当事者が不可視化されているわけではない。第3話で咲子の性体験について語られるが、冒頭で「ドラマ内で性的な接触があります」といった忠告が入る。アロマンティック・アセクシュアルには他人に恋愛感情や性的関心を抱かない、抱きづらいという特徴があるが、中には性的な事柄に対して無関心でいる人もいれば、嫌悪感を抱く人も存在する。『恋せぬふたり』はアロマンティック・アセクシュアルを定義化しつつ、セクシャリティをグラデーションで捉えている。

3—3 『今夜すきやきだよ』(2023)

『今夜すきやきだよ』は、他人に恋愛感情を抱かないアロマンティックの女性と恋愛体質の女性が、セクシャリティやジェンダーロールなどのさまざまな問題に立ち向かう姿を食卓を通して描いた漫画作品とそれを原作としたドラマ作品である。ここではドラマ作品を取り上げる。絵本作家のともこは、家事が得意だが恋愛や結婚に興味のないアロマンティックである。内装デザイナーのあいこは結婚観願望が強く、仕事はできるが家事が得意ではない。二人は高校の同級生の結婚式で再会したことをきっかけに二人暮らしを始める。

この作品は『恋せぬふたり』の咲子と高橋のように同じ恋愛的指向、性的指向を持つ者同士ではなく、『そばかす』の佳純と真帆に近い関係ではあるが、利害の一致により同居を成立させている。さらにあいこの異性愛が、ともこのアロマンティックを軽視することのない構成になっている。

ともことあいこの同居は、異性愛規範を伴わない共助を目的とした生活である。ともこは周囲の人々からマイクロアグレッションを受けつつも、前の2作と違ってその差別から逃れたいために同居したのではない。またあいこは作中で恋人と結婚するが、これがきっかけで同居が解消されることはなかった。ともこは家事、あいこは金銭と住いの提供といった明確な役割が

あり、利害の一致で成立したこの関係は共生の関係といえる。ここでの共生とは、共に同じ所で生活すること、異種の生物が、相互に作用し合う状態で生活することを指す（「共生」デジタル大辞泉）。どちらか一方が家庭を守り、もう一方が外で働くというのは従来の家族の在り方に沿っているものの性別的役割によるものではない。ここでの性別的役割は、女性は家庭に従属すべきというステレオタイプを指しており、家事ができないあいこは性別的役割の観点から見たときにそのステレオタイプから外れている。家事が得意なともこは家庭的な女性像として映るが、異性愛を前提とした社会におけるセクシャルマイノリティに属している。この同居は求められるステレオタイプから逸脱した、セクシャリティに基づく従属関係とは無縁な二人にとってセーフスペースとなっている。

アロマンティックのともこは、ただ家事が好きで得意であるということを結婚や母親に結びつけられてきた。

友人. 普通に結婚すればいいじゃん

親戚. 良いお母さんになるよ（第1話 00:04:42-00:04:55）

回想で登場したこれらのセリフはマイクロアグレッションに該当する。家事能力は良い妻、良い母親であるために身につけるものではない。男が外で働き、女が家を守るという男女の結婚を前提とした一昔前の常識は今でも残っている。人生の選択肢のうちの一つである結婚が、誰にとっても当たり前になっていることがマイノリティへの些細な攻撃に繋がっている。

アロマンティックを扱う本作品において、異性愛者のあいこというキャラクターは非当事者の視点から、マイノリティに対する向き合い方を学ぶことができる重要な存在である。異性に恋愛感情を抱くあいこはマジョリティに属していて、マイノリティに対しては良くも悪くも無関心でいるように思う。それはともこからのカミングアウトに対する反応から見てとれる。あいこはアロマンティックの存在を自分の中で咀嚼していた。カミングアウトされた側の反応はこれまでに取り上げた『そばかす』『恋せぬふたり』でも描かれ、それらの大半は理解できないものに対する露骨な拒絶反応だった。アロマンティック・アセクシュアル当事者を否定せず、対等な関係でいられるキャラクターは当事者にとって特別な存在であることが3作品で強調されている。『今夜すきやきだよ』では二人暮らしが主題にあるため、カミングアウトの場面で拒絶反応や不平等な関係性が描かれることはない。ここでの不平等な関係とは<受け入れる/受け入れない>や<認める/認めない>等といった、受け手側に選択の権利がある状況を指し、そこには多数派と少数派の認知の差が無意識に表れている。カミングアウトをされたときの反応に正解はないが、本作品のあいこの態度は一つの例を示した

ともことあいこの暮らしは、あいこの結婚や出産など、異性愛の物語に回収されない。2人の中には人生の選択肢の中に結婚が含まれるかどうかという違いがある。あいこが交際者と短期間の同棲を決め、ともこは祝福したい気持ちと2人での同居が解消されることに寂しさを感じていた。あいこは交際者との同棲で感じた息苦しさ、ともことの暮らしにある居心地の良

さを比べてしまう。二人の根底には、結婚した二人は一つの家に住み、共に生活をしていくものだという固定観念がある。『そばかす』で佳純と真帆の同居が成立しなかった理由は、異性愛者である真帆が結婚によって佳純とではなく結婚相手と暮らすことになったからである。しかしともことあいこの同居が結婚を理由に解消されなかったのは、この固定観念に疑問を持つことで自分たちにとっての最善策を模索したことにある。『今夜すき焼きだよ』はアロマンティックを扱っただけでなく、ジェンダーステレオタイプなどの問題に立ち向かう作品である。元よりあいこは結婚に家事能力を求められることに嫌悪感があり、女性が苗字を変えたり、妻に夫のケアを求められたりといったジェンダーロールに当てはめられることに疑問を持っていた。そのため交際者との生活も従来のステレオタイプに当てはめようとして交際者とすれ違いが多くなっていった。あいこと交際者は生活スタイルや価値観が異なることを認め、良い関係を維持するために別居婚を決めた。また、結婚するあいこを送り出そうとするともこの葛藤を描きつつ、アロマンティックであるともこがあいこの結婚によって除外されない物語となった。婚約者との結びつきの強さを重要視することは否定されないし、間違っただけではない。しかし必ずしも全員がそう考える必要があるわけではない。同じく異性愛者との同居について触れている『そばかす』も結婚が悪のように描かれているのではない。結婚で道が分かれることの寂しさをアロマンティック・アセクシュアルが感じる孤独の一つとして描いている。『今夜すき焼きだよ』ではあいことともこのように、交際者との結婚とともこの同居が2つに1つではないこと描くことで、アロマンティックが異性愛にかき消されない物語となった。

本作品も『恋せぬふたり』同様に「アロマンティック」がともこのカミングアウトの際に使われる。物語冒頭にともこの恋愛的指向を提示することで、アロマンティックが作品の土台として機能していることを表している。これについて作品プロデューサーの本間かなみのインタビューから引用する。

セクシュアリティにフォーカスが当たるエピソードもありますが、[ともこのアロマンティックを]アイデンティティの一部として描くようなアプローチで作品を作っていました。(小林)

これは、アロマンティックというマイノリティが不可視化されている現状を描きつつ、アロマンティック女性の何気ない日常を写すことにフォーカスすることで当事者に寄り添った作品を作り上げたのだと考える。そのためアロマンティックへの配慮を作品の至る所で見ることができる。異性愛者のあいこがいながら彼女の周りで起こりうる性的接触は描写されることはない。また作中でのあいこの結婚や出産の過程で起こっただろうドラマをあえて描かず、さらっと済ませている。キスやセックスなどの性的な接触や結婚などの異性愛描写は、従来のメディア作品において物語の盛り上がりや、重要なシーンとして扱われてきた。本作品で異性愛描写がその扱いを受けないのは、物語のベースにアロマンティックが存在するからである。他人に恋愛感情や性的関心を抱かない人達にとって、強調された異性愛描写は蛇足だと感じられる。同作

品では異性愛を強調することも否定することもなく、アロマンティックにとって違和感のない表現に留めている。『今夜すきやきだよ』は、ともことあいこの共生によってアロマンティックと異性愛者の共存が可能であることを示し、メディア表現に希望を見いだすことができることを伝えている。

3 作品に登場するアロマンティック・アセクシュアルはそれぞれ恋愛や結婚を前提としたコミュニケーションに溶け込むことができないといった背景がある。異性愛規範のもとでアロマンティック・アセクシュアルは孤独な人と見なされたが、同居を通して恋愛や性的接触の伴わない新しい形の家族を形成した。『恋せぬふたり』と『今夜すきやきだよ』の結末では同居を解消し、それぞれの自立に繋がっていく。孤独とされてきたアロマンティック・アセクシュアルが自分と同じ考えを持つ人や自分を肯定してくれる存在に出会ったことで、精神的に自立し、同居に拘る必要がなくなったことを指す。『そばかす』では同居に至らなかったが、同居が選択肢として存在したことが重要であり、佳純と同じ考えを持つ人との出会いで精神的自立に繋がっている。一人で暮らすこと、誰かと暮らすことは、セクシャリティに影響されるものではなく、誰にとっても自由に選択ができるものである。3 作品は共にどれを選んでも良いことを示している。

「アロマンティック・アセクシュアル」という言葉に関して、作品によって、定義する/しない、という言葉の扱い方はそれぞれが異なる。これはどちらの表現がより正しいかということではなく、定義して存在を知らせることも、あえて存在をぼやかすことも、どちらも当事者にとって意義のあるものである。アロマンティック・アセクシュアルは未だ認知の必要がある恋愛指向や性的指向であるため、多様な描き方を模索することが求められる。そして今後メディアには、アロマンティック・アセクシュアルというジャンルではなく、あらゆるジャンルでその存在が当たり前になり組み込まれていくような展開が必要とされる。

結論

本論文の目的は、アロマンティック・アセクシュアルのアイデンティティに着目し、強制的性愛からなるセクシャルノーマティビティやメディア表現がアロマンティック・アセクシュアル当事者や非当事者に与える影響を明らかにすることで、社会的な理解増進を目指すことである。研究方法は、アセクシュアル男性に焦点を当てたインタビューを行ったプジビロの先行研究を用いて、強制的性愛から生じる当事者の生きづらさを分析した。さらにメディア表現においては『そばかす』、『恋せぬふたり』、『今夜すきやきだよ』の三作品を比較し、アロマンティック・アセクシュアルの表象と同居から得られる〈セーフスペース〉との関わりと、メディア表現が社会的認知に与える影響について考察した。その結果、他者に性的に惹かれないアセクシュアルが抱える生きづらさの要因である強制的性愛には、異性愛を前提とした社会規範や性別にまつわるステレオタイプな役割といった背景があり、それらがアセクシュアル・アイデンティティの確立の妨げになっていることが分かった。そして比較した三作品に共通する〈セーフスペース〉は、アロマンティック・アセクシュアルが異性愛規範から日常的に受けるマイクロアグレッションの存在を浮き彫りにさせ、当事者がそれを脅威に感じずに済む安全な場所として描かれた。そしてメディア表現において、三作品は共通して同居で結末を迎えなかった。これはアロマンティック・アセクシュアルをステレオタイプから解き放ち、一人暮らしや同居といった生活の選択を描くことで、アロマンティック・アセクシュアルの表現における多様性を示したと考えられる。こういったメディア表現は、社会的にアロマンティック・アセクシュアルの認知と理解を深める一つの手段になると考えられる。

最後に、本論文に残された課題について。それは自身によるインタビューを実施できなかったことにある。本論文では主に先行研究を活用したが、アロマンティック・アセクシュアル当事者にインタビューを行うことで、アロマンティック・アセクシュアルが置かれている現状への理解が深まると同時に、当事者の経験から研究の具体性がさらに増すものだと考えられる。

注

1. 2001年にデイヴィッド・ジェイにより設立されたAVENは当初アセクシュアルの人を「どちらの性にも性的魅力を感じない人」と定義していた。
2. 精神疾患の診断・統計マニュアルであるDSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) の診断名である。

引用文献

- Bogaert, Anthony F. "Asexuality: Prevalence and Associated Factors in a National Probability Sample." *The Journal of Sex Research*, vol.41, no.3, 2004, pp. 279-287.
- Carrigan, Mark. "There's More to Life Than Sex? Difference and Commonality within the Asexual Community." *Sexualities*, vol.14, no.4, 2011, pp. 462-478.
- Chasin, CJ DeLuzio. "Theoretical Issues in the Study of Asexuality." *Archives of Sexual Behavior*, vol.40, 2011, pp. 713-723.
- Gupta, Kristina. "Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept." *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, vol.41, no.1, 2015, pp. 131-154.
- Hinderliter, Andrew. "How is Asexuality Different from Hypoactive Sexual Desire Disorder?" *Psychology & Sexuality*, vol.4, no.2, 2013, pp. 167-178.
- Mardell, Ashley. *The ABC's of LGBT+*, Mango Media, 2016.
- Przybylo, Ela. "Introducing Asexuality, Unthinking Sex." *Introducing the New Sexuality Studies*, Routledge, 2016, pp. 181-191.
- . "Masculine Doubt and Sexual Wonder: Asexually-Identified Men Talk About Their (A)sexualities." *Asexualities: Feminist and Queer Perspectives*, Routledge, 2014, pp. 225-246.
- The Asexual Visibility and Education Network, "The Asexual Visibility and Education Network," <https://www.asexuality.org/>.
- Weis, Robin. "Ace Community Survey 2017 & 2018 Report", *The Asexuality Community Survey*, 29 Oct. 2020, <https://acecommunitysurvey.org/2020/10/29/2017-2018-ace-community-survey-report/>.
- 安達 友絵「三浦透子×玉田真也監督 インタビュー複雑なものは、複雑なままでいい」『PINTSCOPE』2022年12月16日。<https://www.pintscope.com/interview/miura-tamada/>.
- 「小田急線切りつけ、逮捕の男「誰でもよかった」…「幸せそうな女性見ると殺したいと」」『読売新聞オンライン』2021年8月7日、<https://www.yomiuri.co.jp/national/20210807-OYT1T50230/>.
- 小野里 涼「アセクシュアルとは？ 特徴やノンセクシャル・アロマンティックとの違い、誤解や現状について解説」『あしたメディア by BIGLOBE』2023年11月19日、

- <https://ashita.biglobe.co.jp/entry/2023/08/10/110000>.
- 木村 正人「非モテ男子が暴発するミソジニー（女性嫌悪）無差別テロの恐怖 英で22歳男が散弾銃で7人を殺傷して自殺」『Yahoo! ニュース』2021年8月14日、<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/3ca6da6cc2ce445702667359d8ee43a5ac28eec5>.
- 「共生」『デジタル大辞泉』小学館『ジャパナレッジ』、<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001004598300>.
- 『恋せぬふたり』脚本 吉田 恵里香、NHK、2022年、『NHK オンデマンド』、<https://www.nhk-ondemand.jp/program/P202100273900000/index.html>.
- 此下 千晶、石丸 径一郎「アセクシュアル・アイデンティティ研究の現状と課題 -国内外における実証研究のスコーピングレビュー-」『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』第24号、2022年、1-12。
- 小林 久乃「話題ドラマ『今夜すきやきだよ』本間 P インタビュー「理解できなくても認めざるを得ないことがある世界で」」『NEWS ポストセブン』2023年3月10日、https://www.news-postseven.com/archives/20230310_1845956.html?DETAIL.
- 『今夜すきやきだよ』脚本 太田 良、山中 瑤子、2023、*Netflix*、<https://www.netflix.com/browse?jbv=81715884>.
- 関口 麗美「アセクシュアル自認男性における葛藤一男らしさと強制的性愛規範の不可視性に着目して」『東京女子大学社会学年報』第11号、2023年、27-34。
- 『そばかす』監督 玉田 真也、2022、『楽天TV』、<https://tv.rakuten.co.jp/content/448094/>.
- 高橋 純子「文言変更にも批判でも成立の LGBT 理解増進法 看護学者が見る希望」『朝日新聞デジタル』2023年11月29日、<https://www.asahi.com/articles/ASRCX4KBVRCPUZU007.html>.
- 田中 敏明、貞松 俊祐、武谷 美咲「LGBTの知識と理解に関する世代間格差」『九州女子大学紀要』第54巻2号、2017年、115-127。
- チェン、アンジェラ『ACE アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』羽生 有希訳、左右社、2023年。
- 羽佐田 瑤子「『恋せぬふたり』脚本家・吉田恵里香インタビュー 「知って、気づいて、直す」ことが世の中の理解につながるのではないか」『TOKION』2022年5月13日、<https://tokion.jp/2022/05/13/interview-erika-yoshida/>.
- 林 慶「恋愛や性愛がなくても、愛に溢れた人生を生きられる。アセクシュアルの私が今、伝えたいこと」『HUFFPOST』2023年5月31日、https://www.huffingtonpost.jp/entry/asexual-life-with-love_jp_6475c09de4b045ce24849908.
- 原宿 なつき「性的関係こそ最も素晴らしい？私たちは強制的性愛社会を生きている」『ヨガジャーナルオンライン』2023年8月30日、<https://yogajournal.jp/19301>.
- 福田 委千代「書評 小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第43号、2016年、55-57。

- 松浦 優「アセクシュアル研究におけるセクシュアルノーマティヴィティ (Sexualnormativity) 概念の理論的意義と日本社会への適用可能性」『西日本社会学会年報』第 18 号、2020 年、89-101。
- 「メランコリーのジェンダーと強制的性愛—アセクシュアルの「抹消」に関する理論的考察」『Gender& Sexuality』第 15 号、2020 年、115-137。
- 三宅 大二郎、平森 太規「日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの人口学的多様性 —「Aro/Ace 調査 2020」の分析結果から 1) —」『人口研究』第 77 号、2021 年、206-232。
- 「日本のアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムにおける恋愛指向の多面性」『ジェンダー&セクシュアリティ』第 18 号、2023 年、1-26。
- 杵田 光、田中 ぬれ奈「「性的関係いない」が伝わらず アセクシュアルの悩み」『朝日新聞デジタル』2019 年 11 月 13 日、<https://www.asahi.com/articles/ASMCD3PH1MCDPTFC002.html>。
- 吉岡 真梨子「Asexual であるという自覚はいかにしてなされ受容されるのか？—ライフ・ストーリー・インタビュー事例からによる—」『学習開発学研究』第 12 号、2019 年、61-70。